

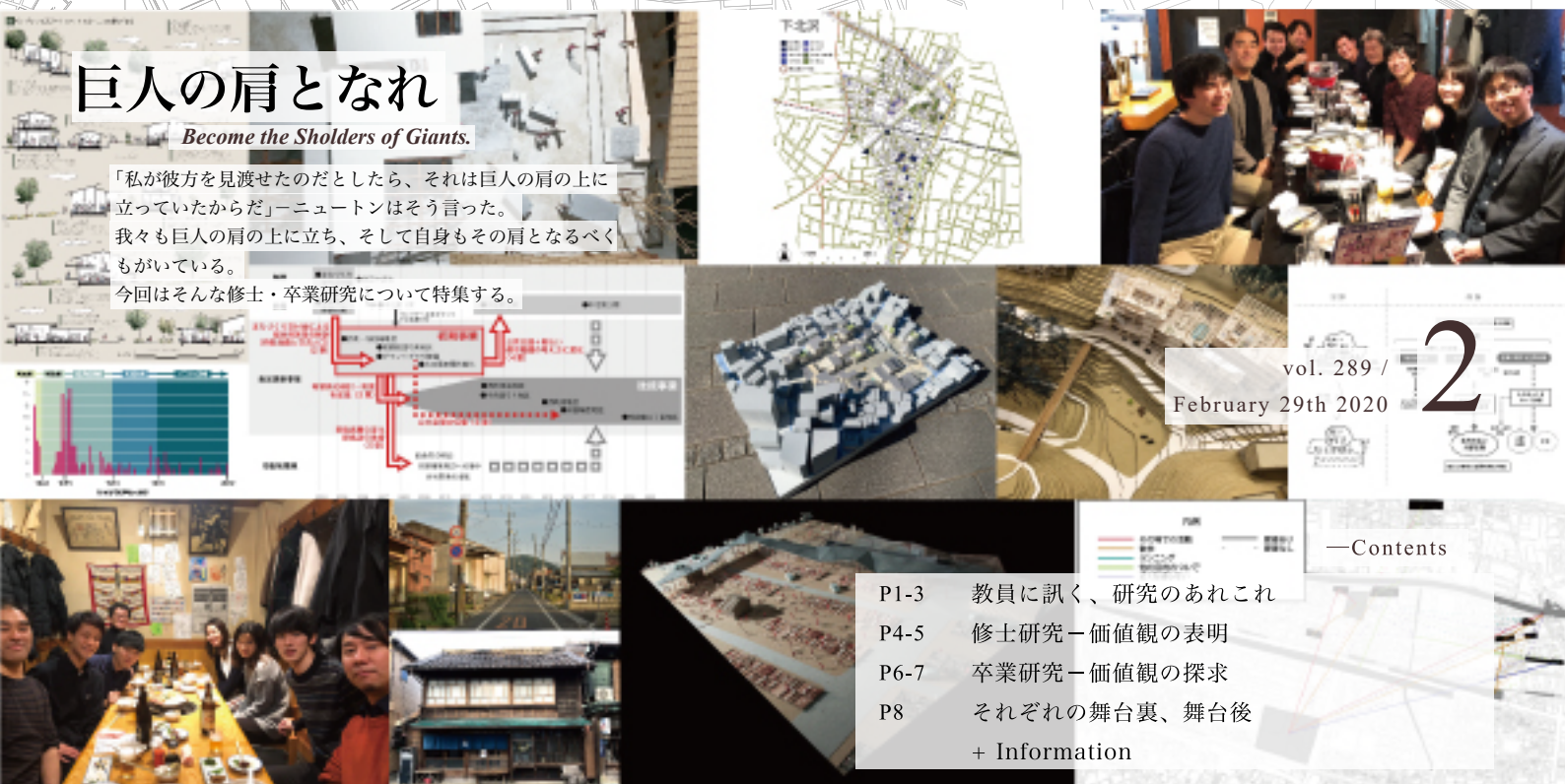
UrbanDesignLab.Magazine

都市デザイン研究室マガジン

巨人の肩となれ

Become the Sholders of Giants.

「私が彼方を見渡せたのだとしたら、それは巨人の肩の上に立っていたからだ」—ニュートンはそう言った。
我々も巨人の肩の上に立ち、そして自身もその肩となるべくもがいている。
今回はそんな修士・卒業研究について特集する。



vol. 289 /

February 29th 2020

2

—Contents

- P1-3 教員に訊く、研究のあれこれ
- P4-5 修士研究—価値観の表明
- P6-7 卒業研究—価値観の探求
- P8 それぞれの舞台裏、舞台後
- + Information

教員に訊く、研究のあれこれ

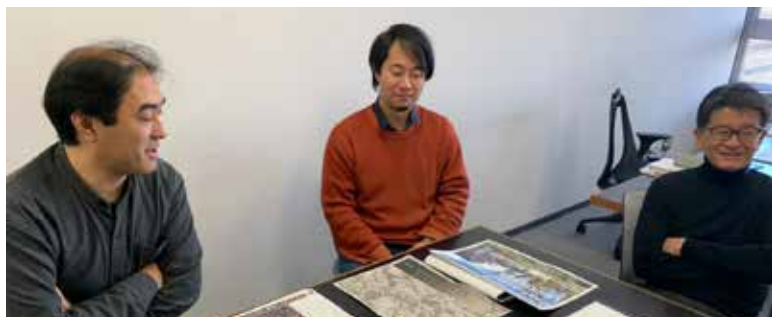
Asking Teachers about This Year's Researches.

text_OTAKE / M1

秋学期が終わり、多くの学生が自身の研究に一区切りをつける時期となった。今年の都市デザイン研究室からは修士生6名、学部生6名が修了/卒業した。修士生6名と学部生4名が社会へ羽ばたき、学部生2名が大学院へ進学する。

彼らの研究について、先生方からのコメントを紹介する。

(聞き手: M1 應武 M1 西野)



▲宮城先生、中島先生、永野先生にお話を伺いました

—まず、卒制全体についていかがでしたか？

中島：去年よりペースが早く、質が良かったですね。例年は分析や地区スケールの戦略に時間がかかり、最後の設計の検討が不十分になりがち。今年は最後まで検討された案が多かった。

—どうしてそのような違いが出たのでしょうか？

中島：それは宮城先生が入られた、体制の違いでしょう。
永野：設計地を変える人がいなかったのも大きいですね。
宮城：設計の場合は形を出していかないと分からないことがある。出来るだけ早く手をつけた方が課題に対する理解、アプローチが深まると思うんです。

スケールの行き来を何回
繰り返せるか

—去年はスケールの横断がこのインタビューで挙げられましたが

宮城：全体的に広く地域を捉えるスタンスは都市工ならではの、そこはきちんとできていたのではないのでしょうか。

中島：1/100、1/200といった具体スケールの検討具合は、今年はかなり優秀でしたね。横断を試みるという意味では毎年変わっていないですが。

宮城：重要なこととして、異なるスケールの行き来を何回か繰り返せるかがある。大きいスケールの問題から小スケールに詰めていって、もう一度大きな問題に戻るか。だから早く形にして、大スケールに戻る時間を確保しないといけない。

—小林君についてはいかがでしょうか

宮城：マイペースだけど早い。処理能力がすごい。
中島：自分の方法論を早く見つけられましたね。
宮城：論文として面白かったと思う。着眼点が良い

かった。最初は人文社会学の方にいくと思っていたけれど、結果的には定量的な分析になったね。
中島：参考になる先行研究を見つけてから大きく舵を切りましたね。彼自身、元々は下北沢が大きく変わろうとしているところに問題意識を持っていなかったけれど、最終的にそこに提言をできたのが良かった。

—野上君については

中島：B3から富山PJをやっていて、かなり長い時間をかけている。いかにも都市工らしくて、大スケールの分析がきちんとしている。一方で設計においては一番苦労したのではないのでしょうか。
宮城：コンパクトシティ化した結果、残ってしまう部分もあって、彼の設計はそこにフォーカスしている。URでも、そのモデルを作ろうとしているね。この問題は個別解しかなくて、彼の設計はそのうちの一つになっているんじゃないかな。ただ、もうちょっと立地環境の特性を出せば良

かったね。水インフラのこととか。

中島：設計当初考えていたインフラの中には、団地内の道路とかだけでなく、農業のインフラもあった。最終的にはそこは薄まってしまいました。宮城：設計手法を作るとこまでは良かったけど、それを実際の空間に展開する中で自分なりのこういうのがいいというイメージがあればもっと良くなったかな。

彼の中でどっちにも 振り切れない難しさがあった

—そういった自分なりの空間イメージというのはどのように身に付けられるものなのでしょう

宮城：それはいかに自分で良い空間を体験しているかだよ。

永野：彼はそういう点ではビジュアルなものを一番参照していましたね。PJのなかで富山のリアルに向けて提案を投げかけたいというのと、廃墟好きという個人的嗜好の2つが重なって、彼の中でどっちにも振り切れない難しさがあったと思う。それを両方やったというテーマ性は面白いけど、空間への反映が難しかったのでは。

最終的に形にするときは 感性みたいなものが出るから

—研究には個人的な関心を持ち込まず、ロジカルに詰めた方が良いという意見もありますが

宮城：最終的に形にするときは感性みたいなものが出るから。それがないと面白くない。

中島：野上君の屋根にはこだわりが出ていたかな
永野：途中で屋根の奥に立山が広がるいい立面図を描いてましたね。

—廣瀬さんについてはいかがでしょう

宮城：正統派。タウンハウスのタイプをかなり分析して、多摩で提案する意味がしっかり出ていたと思う。

中島：集落と言われて違和感があったけど、最終的にはそんな形になっていた。ただ、結局センター計画に留まっている印象。周りの住宅団地への波及効果にも言及できているともっと良かった。でも丁寧で完成度が高くいい作品ですね。

宮城：建物ひとつひとつまで細かくやっている。高低差がある難しい地形で、処理が難しかったと思うけど、模型が非常によく表現できていた。確かに周りの団地がどう変わっていくかなど、敷地と周辺の間のところまでできていると良いかもね。もうちょっと冒険しても良かったかな。

永野：もっとスケッチ、パースが見たかった。得意だろうし。

中島：かなり現実的な提案。でも個人的な思いが強いからだと思うし、近い将来、ぜひ自分自身でこの提案を実現してほしい。

宮城：これからの団地再生計画では床は増やせないから、一つのアンサーがこういったタウンハウスの提案なのではないでしょうか。

—川西さんについては

中島：彼女がベースメーカーになってくれて良かった。最終の空間デザインは素晴らしい。

永野：演習でも小さいものを好んでいて、それを叶えられる対象地を選べたのが良かったのでは。

中島：ただ、形はよく作ったけど、どういう人が

住んで神泉がどう変わっていくか、ビジョンがやや抽象的に留まってしまった。周辺には円山町とかどろっとした人がある。そこに対するものはあまり無かったかな。

宮城：普通のデベに任せたら高容積のまちになるというのは想像できて、そうするとミニ渋谷になるというところへの問題意識があったんだよね。

それに対する提案に取組む姿勢として、自分が住むことを想定するのと、外から俯瞰するのは全然違う。昔の卒制で、自分の家を建てて、そこから周辺を考えるアプローチをした学生がいたけど、川西さんは客観的に見すぎたかな。

永野：提案の中に銭湯がある。どういうシーンで使われる風呂になのかをもっと想像させられるとよかった。外国人は喜びそうだとは思ってたけど。

宮城：風呂から作った方が良かった？

永野：風呂と駅をつなぐのは新しいですね。

中島：ターミナルの一つ手前の駅のあり方についても、どういう人がどういう時に使うのかと言った解答はなかった。そういった、神泉での過ごし方がどのように変わっていくのかまで示せると良かったですね。

—次は鈴木君です

中島：彼は実際に現地で活動してるからねえ。

宮城：彼は対象地で活動する中で出会った人々の顔が思い浮かんできて、自分の思いだけで提案することに抵抗があった。自分の提案で相手がどういう顔をするかを気にしていたね。だから、いい提案だったけど、前半の分析やコンセプトが重くなった。どうしてこの提案をするのかという説明をしないといけないと自覚を持ちすぎてしまったかな。

中島：全体＝山と部分＝廃墟旅館の間のスケールの提案があればよかった。模型はすごく良かった。宮城：廃墟旅館の図面を手に入れたのも大きかったね。山の地形もよく読んでいた。

永野：里山は大事なテーマですね。温泉都市と里山をセットで構想する事例はまだあまりないはず。

宮城：これを持ってまた現地に行くと思うので、

続編に期待したいです。

—最後に河崎君です

宮城：一番造形力がある、器用なところもある。卒業設計として非常にレベルが高い。

中島：人に言われたことを理解して活かす能力がある。最初は中洲だったけど、変えたのが良かった。

永野：1/50 まで作ったのも評価できます。

宮城：欲を言えば、具体的なシーンがもうちょっとあればなあ。あとはお寺との関係がもう少し明快であれば。

中島：聖徳寺裏の大きな空地の話と参道沿いの細かい空地の話をよく同時にやったと思うが、もう少し有機的に結び付くと良かった。2つの提案が別々にあるように見える。聖福寺は変えたいのかな？

宮城：変えたいとは思う。僕だったら寺が周りの土地をどれほど持っていて権利関係がどうなるか調べるね。

中島：駅とか周りの条件を見たときに、どう人が流れるのかが見えづかった。閉じた世界で勝負していましたね。

—次に、修論についてお伺いしていきます。まずは小田島さんから

中島：彼の人柄もあって、よく現場に入り込んで研究したと思う。そこで働いている人の建築スケールだけでなく、周囲の利用や繋がりを見ていたのが良かった。少ないデータだけ見えてきている。ただ、テーマを決めたのが遅すぎた。一つのケーススタディで終わってしまっているのが物足りない。

宮城：研究手法としては確立できたので、他の事例でもできれば良いね。

—仙石さんについてはいかがでしょう

中島：最初は事業とその効果に関心を持っていましたね。でもそれを見るのは時間がかかることで、簡単にも測れない。そこで今のテーマである事業の連鎖的展開に移ったわけですが、富山の連



鎖の展開自体には戦略性はなかったので、論文として悩んだと思う。その中で、すごく丁寧にたくさんの人にヒアリングしている。それぞれ違うことを言う中で、一つの論理にうまくまとめている。

永野：連鎖の実態は戦略的というより、後付けの部分が多いですね。

中島：我々は富山PJを2年間やっているのこういう事業展開が当たり前のことに見えていますが、一般にはあまり知られてないのかな。将来にも役立つ知見が得られたのではと思います。

一原さんについては

宮城：よくできていると思う。地域史と都市計画がうまく重ねあわさった。

中島：駅前通りと街道筋との違いがかなり明確に出て良かった。1つの事例を深めたのが良かったと思います。

宮城：僕としては妙な懐かしさを感じる。鉄道が入ったことによって、まちが変わっていくのを体感しているから。発展の仕方が全然違うまち同士で比較しているともっと面白くなると思う。

中島：土地勘も全然ない中でここまで調べて素晴らしいです。

永野：写真もたくさん手に入れていて、研究室会議が面白かったですね。

一次は藤原さんです

中島：最初は集合住宅の緑の話から始まった。都市計画の視点からの給与住宅への着眼は非常に新鮮で、価値があると思う。

永野：社宅集積地区を見つけたというのはオリジナルですね。

宮城：給与住宅に着目したのは良かったけど、もっと対象としたエリア全体の話をして良かった。

永野：黒瀬先生が言うには博多にも同じような街があるらしいですよ。

中島：杉並にもたくさんありますね。なぜ社宅をそこに立地させるのかといった企業側の事情を説明できたら面白かった。この研究の狙いに反して、社宅の多くがすでに売却、マンション化されているけど、これを機に社宅遺産みたいなものを考えられれば良いのかな。

一前山さんについてはいかがでしたか

中島：苦労しましたね。やりたいことは変わっていなかったけど、理念が先行していた感がある。対象地をずっと探していた。

宮城：現地調査をやればやるほど、考えていたことが実態として見えなくてモチベーションが下がったのではないかと思います。逆にある意味では現地に行かすぎたのが良かったのかも。大手のハウスメーカーが商品住宅を売る中で、どこまで住文化によってカスタマイズされているかというテーマは面白いけど、現地に行っても分からないかも。デザインサーベイまで深くできると良かったのかな。

中島：最初は新十津川村とかも視野に入れていたはず。

福島の話から始まって、集団移転も調べていた。最終的に決めた浦安でも居住地移転後から現在までのプロセスを追うためのデータが得られず、苦労していました。

宮城：浦安は生業が変わっているからね。東北の



▲修論審査の様子。壇上は箭川さん

防災集団移転した団地とかを調べるのもいいのかも。

中島：うまく論証できる場所が見つけれなかったが、テーマ設定はすごく良かった。

一箭川さんはいかがでしょう

中島：一言で言うと、都市デザインと定量解析のハイブリッドな研究。解析研の方との輪講や研究会が背景にあった。解析ベースで進めてきたが、最後の最後に都市デザイン的な感覚が忘れられず、最後に入れた形でした。うちの研究室では珍しい解析的な研究手法ですね。浅見先生にも見てもらったらいいです。面白い論文になったと思います。

永野：当初はやや短絡的な愛着形成の図式を設定してたので心配してたのですが、膨大な収集データに丁寧にみるような角度から分析を加えてくれたことで、結果的に愛着形成の仮定図式自体が面白くなったと感じます。

正直簡単に分析したくない、
モデル化したくない、
そんな簡単な問題じゃない

一ここからはいくつかM1からの質問になります。まず、PJと修論の時間配分についてです。PJでかなり時間を取られる中で、どのように修論に取り組むのが良いでしょうか。

宮城：その人にとって修士課程とは何かということ。本人次第だとは思いますが。

中島：時間が無いのは事実です。

宮城：学生個々の活動と教員の研究は直にリンクしていない。研究室であることをどこで担保しているのかの違いだと思いますよ。

中島：PJやっているからこそ設定できるテーマはある。ほとんどの研究室は決まった研究の方法論があるから進みやすいですね。うちはテーマ設定は面白くても、分析する道具、方法論が決まっているわけでないから、余計に悩みますよね。一方で、正直簡単に分析したくない、モデル化したくない、そんな簡単な問題じゃないという気持ちも

あるよね。

一研究の中で1つの事例を深めるべきか、複数の事例を比較するべきかという疑問があるのですが
中島：それはね、両方やるんです。

博士論文を読んで欲しい。
読むと学術的探求が持つ
「力」を感じると思う。

一最後に、これからの研究に向けてアドバイスをお願いします

永野：自分が思う「ここが面白い」というのを掘って欲しい。まち歩きでも論文読む中でも。設計だけでなく論文でも、独自性や自分の想いが出てほしいと思う。その始まりを早く見つけてほしい。始まりを決めたらある程度は自分でやって、それから人に見せる。人に流されすぎないようにね。

中島：PJと修論、両方やって欲しい。その中でPJはプラクティカルに、論文はアカデミックに。アカデミックに取り組むにあたって、是非過去の博士論文を読んで欲しい。読むと学術的探求が持つ「力」を感じると思う。そこに憧れを持たないと良い論文は書けない。

永野：博士課程の人と喋って欲しいですね。

宮城：情報のリソースが私の頃と今は全然違う。今はインターネットとか、色々な情報源がある。でも、そうした情報が出来上がる過程は全く分からない。現実とバーチャルの情報のギャップ、価値に対して鋭くなるのが大事。バーチャルなものの進歩の中で、逆に実空間の価値が見えてくると思う。

一ありがとうございました。来年度もご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

修士研究—価値観の表明

Master Thesis - Declaration of Your Sence of Values

論文

設計

寄稿_各メンバー

編集_OTAKE / M1

独立型サテライトオフィスが地域との関わりの中でもたらし働き方についての研究—東京谷中に立地する古民家再生型イノベーション拠点を事例として—



小田島啓太
Keita ODAJIMA

対象地：東京都台東区谷中
未来定番研究所

キーワード：
ワークスタイル、出島戦略、イノベーション、都市資源活用、サテライトオフィス



概要

地域コミュニティとの関係、古民家オフィスでの行動、周辺地域利用などの調査から、未来定番研究所のオフィス環境が地域内外の様々な主体との関わりを促進していることを明らかにした。

目的

都市資源の活用を目的とした、イノベーション拠点としての独立型サテライトオフィスのあり方が、ワークスタイルに与える影響を、オフィス環境や地域コミュニティとの関係から考察。

修士研究を終えて

農学部から転籍し暗中模索だった自分が、まがりなりにも興味や問題意識と都市研究を結びつけたのは、小さい成果です。誇れるものがあるとするば、様々な分野に首を突っ込んだこと、その過程での発見でしょうか。自分の修士期間を簡単にまとめます。なんとなく取った起業についての授業を契機にビジネス、ひいては自分のビジョンを実現する行為に憧れを持ち始めました。その後、イノベーションやデザイン、組織論に興味を持ち、本を読み漁りました。デザインについて知るうちに、これまで研究室が行ってきた行為をなぜ「都市デザイン」と呼ぶのか、その議論の軸は何かを理解できた気がしました。また、ビジョンの実現への憧れが「自己表現」への興味につながり、ロック史や美術史に触れました。では、都市計画における「自己表現」とは？そんな思いで『都市計画の思想と場所』を拝読し現在に至ります。「自分はやがて、いくつかの名都を見るに及び都市も一応詩で評価し得るものであることに気づいた」この一節が違和感なく腑に落ちたことが、この2年間この研究室に身を置いた証だと思っています。

同期から一箭川

一時期はイノベーションという大きな概念に対するアプローチに悩んでいたのですが「マジでヤバいかもかもしれない」以外の語彙を失っていた時期がありました。未来定番研究所のワークスタイルを多面的に解き明かしたとても面白い論文です。インタビューからここまで多くのことを引き出せるのかと驚き、そのまとめ方も彼ならではの感じました。

中心市街地における街区更新事業の連鎖的展開に関する研究—総曲輪周辺の富山市中心商業地区を事例として—



仙石宇
Takashi SENGOKU

対象地：富山県富山市中心商業地区

キーワード：
再開発、連鎖的事業展開、中心市街地活性化



概要

富山市中心商業地区における街区更新事業の連鎖的展開がなぜ成立したのか、初期事業と後続事業という図式を導入し、キーファクターとなった初期事業の特徴を明らかにした。

目的

現在まで15年以上に渡って都市再生事業が展開されている富山において、初期事業の経緯と位置づけから後続事業の展開への影響を検証し、中心市街地活性化事業の導入について示唆を得る。

修士研究を終えて

富山市の研究をはじめたきっかけは言うまでもなく富山プロジェクトへの参加であり、プロジェクトと関連させながら進めたことで研究の視野を大きく広げることができた。広場ニストの山下裕子さんから始まり多くの富山市のキーマンの方々にヒアリングさせていただき、これまで直接触れる機会がなかった地方行政の考え方を首長から現場のレベルまで詳細に聞くことができたことは、非常に貴重で濃密な経験である。論文には書ききれなかったが、地方行政がこれほどの情熱を持っているという事実に感銘を受け、また富山市がまちづくりへの強い志を持ちブレない首長、政策を具体化し戦略的に組み立てられる参謀、意識の高い職員が揃う理想的な組織になりつつあるという言葉から期待を抱かずにはいられなかった。しかし計画者の側から聞く内容に対して、現場や聞かれる場当たりの経験談や地元からの不満の声もまた印象的で（これがまさに論文の裏テーマである）、それらを接続させ実態としての中心市街地の活性化を達成する方法論については今後の富山市の動向を見ながら考え続けたい。

同期から一小田島

彼の修士研究は「公共空間の整備による人々の活動への影響、それに対する応答」という視点で修士1年のころから一貫しており、研究成果が積みあがっていく過程を見るのを楽しんでいた。また、彼の丁寧な分析や、それらを視覚的にわかりやすくまとめるところは、見習うべき点が多かったです。

既存集落と新設鉄道駅を結ぶ「駅接続路」の形成史—沿道及び周辺の土地における個々の応答に着目して



原洪太
Kouta HARA

対象地：岡山県総社市東総社駅からの駅接続路

キーワード：
駅前通り、都市形成史



概要

駅前通りを都市・集落の側から捉えた駅接続路という空間について全国状況を把握した上で東総社駅に着目し、特に土地所有や店舗経営の面での駅開業以降の形成過程の論理を明らかにした。

目的

駅前通りを都市・集落の側から捉えた駅接続路という空間について全国状況を把握した上で東総社駅に着目し、特に土地所有や店舗経営の面での駅開業以降の形成過程の論理を明らかにした。

修士研究を終えて

教員、現地の方々などに感謝です。特に総社市の浅野智英さんには、助言・史料収集・現地の古老への取次で多くの時間を割いて頂きました。内容としては駅接続路沿の店舗や土地がどのような経歴を辿ったかというものです。都市計画史の研究では、施政者側が行ったこととその結果を扱うのが普通ですが、徐々に個々の住民のレベルまで見る研究が出ています。都市が住まれるものである以上、都市の大きな変化が個々の住民へもたらすものという視点は重要です。そして一方でこの見方はその後の都市形成の中では「都市計画家なしの都市計画」であると考えています。計画の有無に関わらず、最後のところで都市を形成するのは住民達ということ、特に計画の存在しなかった場所を対象として研究を行った中でこれはやはり正しいと思われました。駅接続路という捉え方を糧にし、働く者としては都市・集落の側の視点を失わず、また一住民としては都市を形成する一端であることを意識しながら都市を楽しみたい。道路建設に関わった住民の使命感が少し緊張した顔、食堂を営む家族のみで笑う顔の写る写真のように。

同期から一仙石

M1から一貫したテーマで、駅と集落との関係を集落の側から読み解き、ふたつを結ぶ「駅接続路」空間の形成過程を明らかにした研究。膨大な資料の収集に基づき全国にまで広げた精緻な駅接続路の分析と、最後まで東総社にこだわり抜いた情熱は、彼の突き詰める力を示していると思う。早い時期から着実に研究を進めていた姿は同期にとっても刺激となっていた。

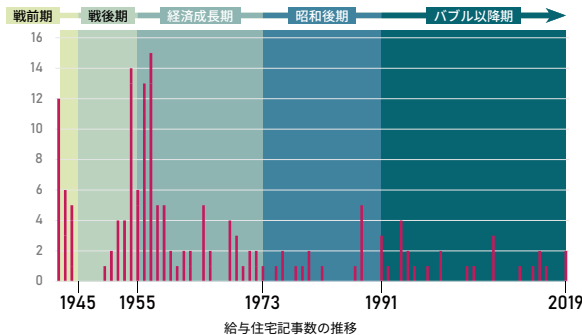
給与住宅および大都市部集積地区の歴史的展開と空間特性に関する研究 －供給主体と都市空間の両面に着目して－



藤原大樹
Daiki FUJIWARA

対象地：東京都文京区白山御殿町

キーワード：
給与住宅、給与住宅集積地区、空間特性



概要

わが国の給与住宅の歴史的展開を住宅政策的、空間計画的観点から概観し、東京都区部における給与住宅集積地区の事例から立地、集積地区の形成と変容の過程、空間的特徴を分析した。

目的

これまでも給与住宅がどのようにわが国の都市に供給されてきたか、その特徴を多角的に分析し、近年その数を減らしている給与住宅が今後の都市において果たしうる役割を考察すること。

修士研究を終えて

まず、人で賑わう繁華街の大通りをかき分け進む研究より、閑静な住宅地の路地をのらりくらりと歩む研究をすることができ、素直に楽しかったです。だからこそ、研究の各方面において、道を探りながら慎重に歩を進めていかなくてはならず、その終着点もはっきりとしないままでした。

ここで、出来上がったものを見ると、やはり自分が知りたいこと、やりたいことを一途に調べた第一章から第五章のそれぞれの内容は概ね充実しているようにも見えますが、よくよく見返してみれば序章、終章がお粗末な、「起承転結」の「承」しかできていない平坦な研究であるようにも見えます。

ですが、この研究のひそかな目的は、端からバシバシしているでしょうが、「自分のまちの歴史を知ること」であります。それは「給与住宅」という小さな窓から眺めた景色でしかないことは分かっていますが、大なる目的を達成できたことには充実感を抱いています。最後に、このような取り留めもなく、わがままな研究にご指導、お付き合いただいた、先生、先輩、同期、後輩の皆様に感謝を申し上げ、修士研究を終えたいと思います。

同期から一原

夏から秋にかけての資料収集の量に感服でした。どんだけ雑誌漁ったんだろ。時代に応じての社宅の空間構成の変化や、江戸時代の土地利用とも絡めて緑がどの程度残存しているかなどに加えて、インタビューで聞いていた社宅内のちょっとした人間関係など、正負を持ち合わせていたのが興味深かった。期間中はポケモンを我慢していたことを褒めておきます。

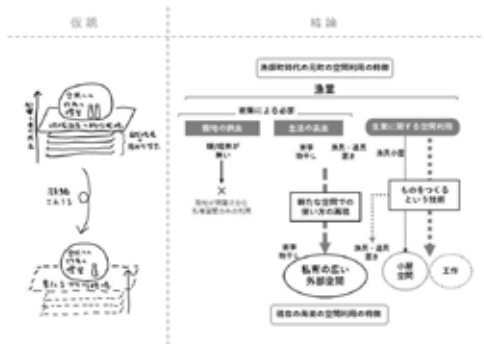
生活空間への作為の慣習の移住先における持続性に関する研究 －漁業権補償地である浦安市海楽地区の住宅外部空間に着目して－



前山倫子
Rinko MAEYAMA

対象地：千葉県浦安市海楽

キーワード：
漁村集落、生活空間文化、移住、継承と持続



概要

生業の消失および物理 / 社会環境の大きな変化を経た元漁師住宅で、移住前の漁師町時代の慣習がその内容や目的を変化させながらも持続していることを外部空間利用の実態から示した。

目的

環境の変化が経たとしても、移住前後の空間の使い方はルーツとしてつながることから都市の固有性は変化しながらも持続されることを示し、物的環境を超えた保全の可能性を提示する。

修士研究を終えて

「ある都市を離れたとしても、その空間やそこでの生活から受けた影響は何らかの形として人々に残っていくはずで、それなら新しい都市での生活にもかつての慣習がかすかにあっても現れているはずだ」という考えから、あるいは「そうであってほしい」という個人的な願いから、修士研究を始めました。このテーマを持ち続けられたことは良かったのですが、結局は調査も分析も「もっとこうでたら」という悔いがたくさん残るものになってしまいました。この「悔い」のほとんどは「もっと海楽という場所のことを丁寧に記述できたのでは、表せなかったことがたくさんあるのではないか」というものです。自分のために始めた研究を何とか形にできたのは、ひとつの対象地に通ううちに、少しでも対象地やそこに関わる人のためになるようにしなければという実感を持つようになったからだと思います。

普段の生活から提出の直前まで、先生方や同期、家族をはじめ本当にいろいろな方に助けていただきました。本当にありがとうございました。駄目なところもあるけれど、この研究をできた自分であることが今とても嬉しいです。

同期から一藤原

研究会会議で、修士研究に関する発表を同期の中で一番最初にしたのは前山さんだったと記憶していますが、その時点で風土、生活、継承についての問題意識がはっきりしていて、感心するばかりでした。修論発表では、一軒一軒の家を丁寧に観察した一部しか現れていないように思いましたが、最後まで軸がぶれなかったその走りを、製本版でゆっくりと読みたいです。

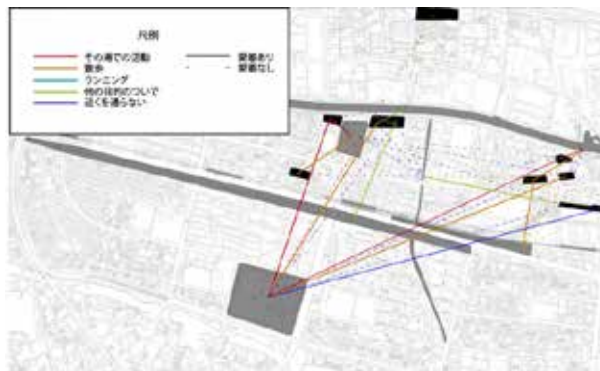
都市部における若年層単身生活者の地域愛着形成に関する研究



箭川展
Hiromu YAGAWA

対象地：定量調査：首都圏 / 定性調査：板橋区高島平

キーワード：
単身生活者、地域愛着、都市デザイン



概要

若年層単身生活者はファミリー層と異なる地域愛着形成の特徴があることが明らかになり、また「単身生活者だけのための空間」でなく「単身生活者も滞在しやすい」空間の必要性が示唆された

目的

地域と関係ない存在とみなされがちで、あまりまちづくりの対象となっていない都市部若年層単身生活者に向けた都市デザインの可能性を探るため、彼らの地域愛着形成の特徴を明らかにする

修士研究を終えて

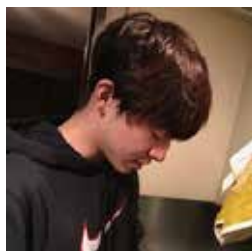
卒業設計から、自分のような若い人は住む地域のことをどう考えているのか、ということに関心がありました。地域の活動に関わるのは何か違うが、住んでいる地域に愛着がないわけではないのではないか。そういった考えがこの研究の根底にあります。定量的な調査の分析を行っている際には、自分はなぜ都市デザイン研究室にいるのだと悩む時期もありましたが、最終的に高島平という一つの場所と都市デザインという視点にこだわることでできたのは良かった点かと思います。

論文を書く中では、「巨人の肩の上に立つ」という言葉の意味を思い知らされました。なんとなくわかっていてと思っていた内容は、実際には明らかになっていませんでした。具体的な方法論の検討を怠ったまま先を急いだ結果、後に戻らざるを得ないということを経り返しました。学問の世界は離れることになりましたが、論文に限らず「知」はすべて巨人の肩の上に立つのだと感じています。これからの学びにおいても、何事も曖昧にすることなく自分の中に「知の巨人」を屹立させ、さらにその上に学びを積み上げていく所存です。

同期から一前山

都市デザインを感覚的にではなく自分の納得できるやり方で根拠をもって理解したい、という主義を曲げずに、単身者である自身の疑問と向き合った研究だと普段の姿や発表から受け取りました。自分も抱えているものがある中で、いつも周囲と良いコミュニケーションを取り和を保つのは、箭川くんだからできることだなと思ったし、それに助けられました。

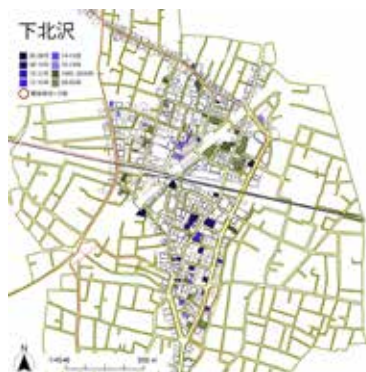
都市構成要素の更新周期差の研究 －定量的な「更新周期差」の観点から「シモキタらしさ」を捉える－



小林拓人
Takuto KOBAYASHI

対象地：下北沢

キーワード：
周期、下北沢、構成要素



概要

都市の構成要素ごとの更新のあり方を定量的に調査することで、その都市らしさを解明する。下北沢を対象地として、定性的な研究の多い「下北沢らしさ」についての定量的な分析を行う。

目的

都市の更新速度がますます早くなる今、更新周期という概念は、その都市らしさを解明する際に重要になってくるため、従来なされていない「更新周期」という視点からの都市の研究を行う。

卒業研究を終えて

この論文を作成したことを振り返り、論文の意義について述べる。
第一に、結論の節でも述べたが、これらの研究内容の間に相互作用があり、説明を可能とする新たな観点を提示したことは、下北沢のみならず、他の都市でも応用できる可能性を秘めているため、応用可能性のある研究である点で意義がある点と考える。第二に、例えば区画割りのような単一の観点でなく、複数要素の絡んだ、言い換えると複数の変数を持つ分析数値により「都市活動、文化、性格」というソフト面の研究を可能にした点で、論述の強い研究であったと考える。第三に、問題提起の段階ではあるものの、都市が直前に迎える将来の姿が、従前の「都市活動、文化、性格」のトレンドを踏んだものであるか、そして迎合するものであるかということ考察することができるといって、開発の是非や都市の在るべき形を考える一助となると意義を持つと考える。
個人的には、下北沢という好きなまちについて、今までなされなかった角度からの研究を行うことは、方針に迷うなど苦労もたくさんあったが、やりがいにとってもあった。

同期から一河崎

「その町らしさ」という言わば「愛着」のようなぼんやりとした概念は都市工ではよく語られますが結局よく分からないまま終わることが多い印象があります。しかしそれに対して、定量的に評価し、再現性があるというのが、ある意味、都市「工」学科の卒業論文らしく、新しい都市の視点が得られていて斬新でおもしろいと感じました。

Cultivating Post-suburban Landscape



野上正行
Masayuki NOGAMI

対象地：富山市営城村団地
(富山県富山市城村)

キーワード：
ポスト郊外、裏コンパクトシティ、Landschaftspark Duisburg-Nord、Post-industrial Landscape



概要

市営団地跡地を田園地帯に挿入されたインフラの束として捉え、既存道路への建築と半恒久的機能の集約、団地街区を単位としたインフラと農に関する諸機能の動的転換パターンを提案。

目的

20世紀が郊外化の時代なら21世紀はPost-suburbanの時代である。コンパクトシティ政策の「串と団子」から漏れた団地を対象に、田園地帯でくらす新たな景観像を提案した。

卒業研究を終えて

富山PJに携わって感じていた「お団子と串」の外の空間像の不在の問題からテーマを決め、8月頃にPost-industrial Landscapeに着想を得てPost-suburban Landscapeという概念に至りました。未知の概念の提唱・実体化は、難しさもありながらテーマ自体の面白さに駆り立てられて楽しく進められました。ただ、Post-suburban Landscapeを設計でどのスケールまで扱うか（1つの団地か、複数の団地のネットワークか、平野スケールか）に長期間迷い、12月頃までほとんど設計が進みませんでした。提出直前期にはテーマ自体の魅力に対して自分の提案する空間像が貧弱なことに無力感も感じました。
城村団地を対象とした設計はこれで終わりですが、Post-suburban Landscapeという概念自体は就職先の都市再生機構でも継続的に考えることになると思いますし、この卒業設計が今後振り返る重要な拠り所のひとつになると考えています。研究を支えてくださった先生方・先輩方・同期の皆さん、ありがとうございました。

同期から一小林

新たな郊外についての提案を、先行事例の研究や多様な観点でも分析、考察を踏まえつつ行っている素晴らしい設計提案です。今回の対象地である富山についての特性についても、地理的条件、農業、ライフスタイル等ソフト面、ハード面双方に配慮し、そぐものになっている上でさらに創造性のある設計です。個人的には緑、農の捉え方が素敵だと感じました。

多摩ニュータウンの「なりわ居」集落 －私たちの郊外暮らしを支えるライフスタイル型センター－



廣瀬真衣
Mai HIROSE

対象地：多摩ニュータウン諏訪・永山近隣センター

キーワード：
郊外、ライフスタイル、働く



概要

郊外で暮らしながらも働きたいという想いを抱えてくすぶっている人々のため、時・空間的な自由度をもって働く空間である「なりわ居」を挿入したライフスタイル型センターを提案する。

目的

郊外には、結婚や出産を機に仕事を辞めたお母さんたちや定年退職したシニアをはじめとくすぶっている存在がいる。こうした主体が各々の想いを叶える「なりわ居」をかたちづくる。

卒業研究を終えて

まず、卒業設計で、就活以来ずっと抱えていた女性としてのキャリアに対する不安感を扱ったことはよかったと感じています。4月の研究会議で先生方と課題意識の原型を共有してから1年弱、最終発表を終えた瞬間は重荷を下ろしたような解放感で幸せでした笑。ただ、今になって振り返ってみると、現実主義で思いついた思考・行動をとれない自分の性格が表出した設計だったと後悔も残ります。コンフォートゾーンから抜け出せなかったと言ったほうが正しいかもしれません。課題意識や分析の深堀が足りなかったから独自性が弱かったとか、今現在を意識し過ぎて未来志向の提案ができなかったとか、もっとセンター周辺にしみ出す空間提案ができたらよかったとか、いろんな想いがよぎります。一方で、卒制期間は心から楽しいと感じる瞬間が沢山ありました。個性溢れる先生方のエスキスは少し緊張しつつも楽しみだったし、自分の手で図面を描いているときは無心になれたし、そして何よりほぼ毎日顔を合わせた同期との時間はかけがえのない宝物です。今後は、この経験を糧に粘り強く生きていきたいです！

同期から一野上

宮城先生のおっしゃっていたビジュアルライズを時間的余裕をもって進められていて、最終成果物の密度や丁寧さが3年の集住演習の頃からさらにパワーアップして流石だと思いました。また、直前期になっても明るく気丈にふるまう様子は演習室の雰囲気の良い方向に動かしてくれていて、僕も含めてデザイン系研究室の面々も良い影響を受けていました。

「間」の再生 ー渋谷とは異なるまち、神泉



川西 絢子
Ayako KAWANISHI

対象地：渋谷区神泉

キーワード：
渋谷再開発



概要

神泉が時代の中で失った「谷間」「空間」「世間」という3つの「間」を再構築し、渋谷とは異なる「間」のあり方を目指す。

目的

神泉の魅力を掘り起こして、渋谷再開発に対して自分なりの答えを形にする。インバウンドが魅かれる渋谷らしさとは何かを考える、という目的もありました。

卒業研究を終えて

「まず手を動かす。形からわかることもたくさんある」宮城先生からの一番の教えです。私は考えすぎて手が止まりがちなので、何度も背中を押してくださいました。卒業「制作」を選んだ理由の1つは、3年の集住設計までの私の評価を覆したかったからです。今までの私は手先が不器用なので模型やパネルの丁寧さに欠けていましたが、今年度は留年して挑んだ分、後者の完成度を上げて卒業しようと狙っていました。模型の材料、パネルのレイアウト、発表原稿に至る全てのアウトプットを周りに確認しながら進めたのは初めてだったので新鮮でした。先生方を良い意味で裏切られたのであれば、これほど光栄なことはありません。やれるだけのことは全てやり、ありったけの時間を注ぎ込んだのは、周りの皆さんのおかげです。本当に有難うございました。とはいえ自分の知識不足を実感しましたし、堅い設計にはなりきれませんでした。社会に出て常にも学ぶ姿勢は忘れたくないです。

同期からー廣瀬

まず、神泉というなんとも魅力的な敷地を選んだセンスが本当に秀逸だなと思います。また、早い段階から空間の検討を始め、その進捗の速さで同期を引っ張りながら、質の高いアウトプットまで駆け抜けていったという印象があります。個人的には、同期唯一の女子としてたくさんおしゃべりの相手をしてもらったこともあり、いろんな感謝でいっぱいです！

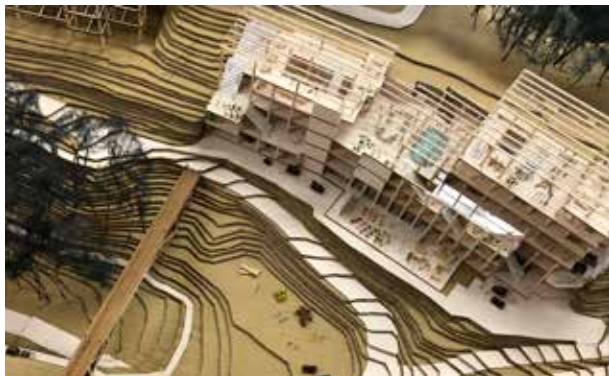
山背復権 ー山代の地域性を未来へー



鈴木直樹
Naoki SUZUKI

対象地：
石川県加賀市山代温泉

キーワード：
里山「萬松園」とまちの再生



概要

山代温泉の里山「萬松園」は現在荒廃しているが、昔は山代の文化と密接に関係してきた。萬松園の未来のあるべき姿を検討し、山代と萬松園の関係を回復し、山代の価値を創出する。

目的

温泉地の廃業旅館や暮らしとの繋がりが希薄化する里山の荒廃など、現在起こる様々な問題に対する考え方を提示する。特に萬松園は「里山」以上に歴史・文化を有しており、その再生を図る。

卒業研究を終えて

卒業制作の完成度についてまだまだ満足できていないわけではないが、ひとまずやりきることができました。研究室の先生方にご指導を頂きつつ、卒業制作のメンバーとともに演習室でしっかり追い込むことができたからであります。とても感謝しています、大変ありがとうございました。本卒業研究は1年半にわたる現地での地域住民の方と協働で行う萬松園再生プロジェクトと連動しています。①過去の絵図や石碑、文献の収集によるかつての萬松園の様子把握、②温泉旅館オーナーや萬松園で活動される団体、薬王院温泉寺の方など地元住民の方々へのヒアリングによる、近年の萬松園の様子やこれからの萬松園の思いに関する調査、③山代温泉の小学生とともに約月1回萬松園をフィールドワークする萬松園探検隊、などの活動を行ってきました。プロジェクトに即して現実的なリアリティを持たせつつも、卒業制作としていかに殻を破るかが難しかったです。今回やりきることができ、萬松園そして山代温泉の未来のあるべき姿を確信することができました。3月に現地で発表予定なので、その思いをきちんと伝えてきたいです。

同期からー川西

まちに自ら入り込み、合間を縫って何度も敷地に通っていた情熱は同期の中でもダントツ。宮城先生からは「優柔不断すぎ」と言われていたけど、最後がっちりかたい提案をしていて尊敬した。作業中、隣の席で即爆睡する鈴木くんを同期でいじり倒したのはいい思い出。修士では食べられる野菜を増やしていこうね。

包み、和える。 ー博多の食がつむぐ包容と調和のコモンズー



河崎 篤史
Atsushi KAWASAKI

対象地：博多・御供所町

キーワード：
グローバル化、食、寺町



概要

国境や言語を超えた営みである「食」に着目し、アジアに近接し豊かな食文化を有する博多にて、グローバルとローカルの両方を包容し、相互の魅力を引き出し合い調和するコモンズを提案する。

目的

グローバル時代においてグローバルを受け止めながらもローカル性を維持していく町のあり方を食という観点から模索する

卒業研究を終えて

卒業研究の期間は「都市工の卒業研究とは何か」「建築の卒業研究とは何が違うのか」「都市デザインとは何か」・・・と「都市」について考え、「都市」にこだわり続けた期間でした。正直、終わった今でも腑に落ちていないのですが、ひとつ思うことが、都市は時間という巨大なスケールでの思考によって連続しているということです。いま見えている風景はあるべくしてあるというか・・・そこにあえて手を加えることの慎重さに気がかされた気がします。(まとまらずすみません)ではさらにその先、実際にそういう思考がちゃんと形になったのか？というまだまだだなと思いますが、でもこうして無事終わることができたのも本当に皆さんのアドバイスをくださった先生方・先輩方、手伝ってくれた後輩たち、そして一年間高め合った同期たちのおかげです。本当にありがとうございました。来年先輩として後輩を支えられるようにこれからの院での生活と勉強に励みます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

同期からー鈴木

ストーリー、パネル、模型、全てが洗練されていてとてもカッコいい。手書きの図面もいい味を出している。日々綺麗な模型が立ち上がっていく様子を隣で見ていて惚れ惚れした。特に1/50は1週間前から数日前くらいに作り始めていたが、出来栄は圧巻で最高でした。誉めすぎですかね。大学院に入ってから一緒にやっていたのが楽しみです、よろしく。

それぞれの舞台裏、舞台後

Scenes of the "Researchers"

text_NISHINO / M1

時に頭を抱え、時に身を削り取り組んだ修士研究と卒業研究。だが彼らの側には常に心強い同士と先生の姿があった。
最終発表までの舞台裏、また舞台後の彼らの様子をご覧ください。



Information



Hey listen, -ちょっと聞いて！

2.3 修論ジャーニーで発表しました！



他の研究室メンバーの研究に触れる数少ない機会。同期の進捗を肌で感じました。修論提出まであと1年、コツコツと進めて行きたいです。(M1 宗野)

2.24 スタジオの提案を地元で発表しました！



「やねせんあたり研究会」で地域の方に向けて、スタジオの提案内容を発表しました。参加者みんなで、模型を指差しながら議論しました。(M1 宗野)

2.12-13 卒論、卒制完結



B4生の集大成、卒業論文・卒業制作の最終発表が行われました。後輩達の堂々たる有志を目にし、我々も身が引き締まる思いで一杯です。(M1 西野)

2.24 高島平で URBAN DESIGN



WALK&TALK Vol.3を行い、子供から大人まで多くの方にご参加頂きました。「商業」をテーマに高島平の将来について考え、議論できました。(M1 松本)

プロジェクトに修論にコンペに就活、相変わらず慌ただしい日々が流れる当研究室。垣間見える春の兆しに包まれたいものです。

2月のWebマガジン

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



2.6-7 奈良の住宅地で都市内農業を体験
菜園講習会講師の自宅を訪問し、家庭菜園や都市内農業の実態を視察してきました。(M1 應武)



2.14-19 バンクーバー視察！

富山PJでバンクーバーを視察しました。その街並みと背景にある政策に胸を打たれました。(M1 佐鳥)

3月の予定

3rd (Tue.)	小高 PJ ヒアリング
4th (Wed.)	手賀沼 PJ 現地打ち合わせ
10th (Tue.)	上野 PJ A&S 運動実行委員会
23rd (Mon.)	追い出しコンパ
25th (Wed.)	手賀沼 PJ 生き物観察会
28th (Sat.)	三国 PJ 2019 年度活動報告会
28th-29th	小高 PJ まちなか菜園講習会

✂ 編集後記

自分は卒業制作に忸怩たる思いがある。それは昨今の今頃からずっと変わらないが、今年の卒業制作のレベルの高さを目の当たりにして、より一層強まった。テーマ設定が難しすぎた、昨年と今年は状況が違うから、昨年は体調が悪かったから……色々な言い訳で目を覆ってみても、指の隙間から見える「自分の能力不足」という事実は厳然と横たわったまま。

自分の修士研究は卒制の続きである。あきらめの悪さだけは、誇れるかもしれない。(M1 應武)

■ マガジンへのご意見・ご感想をお寄せください

ご意見やご感想を投稿していただけるフォームを試験的に開設いたします。
QRコードまたはURLよりアクセスし、お気軽にご投稿ください。
URL : <https://forms.gle/M33De1hfNReuMDxJ7>

